

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本と中国の動物話の比較
Author(s)	張, 振興
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 15期 : 121 - 126
Issue Date	2001-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038912
Right	
Relation	



日本と中国の動物話の比較

張 振興

はじめに

昔話と動物の間には切っても切れない縁がある。話を日本に限るならば、有名な『桃太郎』や『かちかち山』などに見られるように、動物たちが実に魅力的に活躍をしている。もし、「桃太郎」のイヌやサルが人間であったら、あの話はずまらないものになっただろう。同じように、中国の『西遊記』の主人公 孫悟空も重要な役割を担っている。動物であるからこそ、私たちの空想をかき立ててくれるのである。これは日本と中国を問わぬ現象である。

周知のように、日本と中国は同じ東アジア地域に属しており、昔の日本は中国から大きな影響を受けた。両国の文化が非常に近いと言ってもよからう。だから、両国の昔話における動物たちの物語はもちろん国によって違うが、きっと何かの共通点があると思われる。本稿では、まず第一に、動物話の類型について、第二に、動物たちと人間のかかわりあいについて、両国の共通点と相違点を総括する。そして最後に、動物話の創作と人間の生産力の関係を検討する。

一 動物話の類型について

日本の動物話を読んで驚くことは、日本動物話にあらわれるタイプのうち非常に多くのものが中国の動物話にも見い出されるということである。しかし、両国が極めて古くから密接な関係にあったことを思えば、それは大して驚くべきことではないのであろう。日本と中国は、文化も国民の思想も近いから、動物話の創作の構想が大体同じである。だから、両国の動物話はタイプが同じものが非常に多い。ここで二つのタイプを例にしてみよう。

(1) 動物がどうして今の姿をしているかという創り話が多い。たとえば、サルの尻が赤いのは何故かということ、たくみに話に仕立てている。悪さをして、焼けた石に坐らせられたという類である。あまり科学が発達していなかった古代では、人間は不思議な姿をしている動物たちに好奇心を持っていたわけであるが、科学的な解釈ができない。だから、人間は豊富な想像力によって、いろいろな動物の起源に関する物語を創った。また、この空想的な動物話であるからこそ、人間の多くの疑問が解釈できるだろうと思われる。

このタイプの動物話の内容は両国とも二種類に分けている。

一種類は、動物は神様に造られて、世間に出現したということである。たとえば、日本

の北海道の昔話、『太陽とカラス』はこう言った。

遠いむかし。

天空は太陽がなくて、深い闇に包まれていた。

(中略)

世界の創造主カムイは無数のカラスを造り出した。カラスの羽毛は、悪魔の支配する闇の世界と同じ色をしていた。

(後略)

もう一種類がある。まず、例をみよう。中国の南方の布依族の昔話、『蛇とミミズ』である。

昔、蛇とミミズは土の中で仲良く暮らしておった。

ミミズにはきれいな丸い目があった。

蛇には目がなかったが、良い声で歌うことができた。

(中略)

ある日のこと、蛇とミミズは美しい声と目玉を交換した。

それからは蛇に美しい目がついたが、もう二度と歌うことはできなかった。目が見えるようになると、蛇は土の中がいやになって、うらうらと暖かい日に地上へはい出るようになった。

盲になったミミズは、今でも土の中で歌を歌っている、けれどもミミズは、土ばかり食べていたので、せっかくの良い声も蛇のように出せなくなった。今でもミミズは、ツ、チ、チ、チ、チ……と、細い声を張り上げている。

この動物話のように、動物たちが神様の力を借りることなく自分たちの意志で今の姿になった。これは日本と中国の動物起源に関する昔話のもう一つの類型である。

(2) 日本と中国の動物話のもう一つの大切な類型は、動物の人への変身である。そして、動物は変身後、人間にとって善と悪の二つの場合がある。

善の場合は動物が美しい女になって、貧しい人に尽くすという動物話が多い。ツルが美人になって、その羽毛で高価な織物を織ったり、魚が妻になったり、蛇が丈夫な子を産んだりする。このような動物話の結末は、大抵の場合、善良で貧乏な人が幸せになって、凶悪な金持ちが当然の懲罰を受けるようになる。これは、当時の社会の不平と民衆の生活の貧乏を反映している。貧しい民衆たちは、社会の制度と統治者に対して不満を持ってもそ

の状況を変える力がなかったから、未来の幸せな生活を空想するしかない。動物話は文字通り民衆が生み出し、民衆が語りついだものである。そこで、民衆が現実で果たせぬ夢を話の中でかなえた。

日本では、動物が変身後、ほとんど人間を助ける。しかし、日本との相違点として、中国の動物話には変身後の動物が人間をひどい目にあわせる場合もとても多い。このような動物は中国で「妖怪」と謂われている。妖怪は大抵の場合、山の奥で修行を通して、人間の姿になった。また、人間のできない法術を持つ。中国には、『搜神記』、『太平広記』、『聊齋志異』などこのような種類の物語をあつめた書物が多くある。その中には狐の変身の物語がきわめて多い。狐媚、狐惑などという言葉もあるように、狐は人間をからかったり惑わしたりする。概して古代の中国の狐妖は、女に言いよる男狐にしても、男を誘惑する女狐にしても、人間に対して非好意であり、敵対的である。

動物の変身は、動物話の中で多くの分量を占めている。ここで注目しなければならないのは、両国とも人が動物へ変わることがきわめて少ないということである。このような話がないわけではないが、意地悪であったり悪いことをしたりして、動物に変えられてしまう場合しかない。このタイプの話としては中国で『かいこ』ということがある。将校が相当長い期間家を離れなくてはならない。妻は、夫をとりもどしてくれた人には娘を嫁にやる、と言う。馬がこれを聞いてはしっていき、将校をつれもどしてきて、ぜひ娘と結婚したいという。馬は凶悪な将校に殺され、皮は庭に面した壁にぶらさげられる。娘がそばを通ると馬の皮は娘を包み、娘と共にかいこになる。

このようなタイプの動物話は日本でも非常に少ない。何故両国とも人が動物へ変わることが少ないかという理由は当時の状況を考えれば明らかになるであろう。その頃には自然が人間の戦いあう相手であった。昔話を生んだ庶民にとって、自然はひどく危険に満ちあふれる神秘的な世界である。彼らの頭の中で、動物に変身して自然の中に溶け込むことが災難だと考えていただろう。だから、昔話の中で意地悪な人にしか動物へ変えさせない。これは人が動物に変わるというタイプの動物話が少ない理由の一つだと思う。

二 動物と人間のかかわりあい

動物話は、単純に動物だけの話ではなくて、一般的に動物と人間のかかわりあいを廻って展開することである。そして、自然ではなく人間の社会を舞台にするのは日本と中国を問わぬ話の創作の形式である。つまり動物たちは人間の生活する枠で活躍している。動物話の中で、人間と動物が同じレベルに立っている。ところで、動物と人間の触れ合いを通して、動物の善良と忠誠が見られると言えよう。たとえば、動物の人間への恩返しや人間との愛と結婚である。

- (1) 動物が人間に受けた恩に報いる話が最も多い。

日本と中国で、その最たるものが竜宮の話である。これは竜に限らず、海に住むさまざまな動物が救われ、救ってくれる人を竜宮へと案内する。さまざまなバリエーションがあるようであるが、報恩が糸口になることでは変わりがない。

この他、ありとあらゆる動物が救われる。ヘビ、ツル、コイ、スズメ……日本と中国に住むほとんどの動物が人間に救われたことがある。昔は今より比べものにならないほど自然が豊かである。人間が傷ついた動物に出会うなどは日常茶飯事であったのだろう。これは、救われた動物の種類が多い理由の一つであると言ってもよからう。

また、一部分の動物報恩の話は、動物の忠誠と対照的に、人間関係が金銭や権勢に左右されて熱したり冷めたりすることを風刺している。動物の話を通して、人間の無情を批判している。たとえば、日本の東北地方の昔話、『人間無情』がある。旅の医師が、洪水に会い、幸いにも流れてきた流木につかまって助かる。そして溺れそうになっている蛇と狐と人間を助けてやる。ようやく岸について、その土地の長者の家の直してやってその家に客分として滞在することになるが、助けてやった男がそれをねたんでざんそし、医師は牢に入れられる。これを知った蛇と狐は相談して、蛇が長者をかみ、狐が占師となってでかけて行って、牢の医師に傷の手当をさせるとともに、男の悪事をあばいて医師の恩にむくいる。中国にもこれに似た話がたくさんある。たとえば、『蛇吞相』、『七色鹿』などである。このような話の中で常に、約束を破ったり騙したりする方は人間で、動物の方はもっと純粹でありすぐれている。

ところで、筆者はとても不思議なことがある。日本の動物話の中に、家畜が報恩の動物として登場する回数が少ないということである。イヌ、ウマ、ウシ、ニワトリなどが主人公になることはまずないといってもよい位である。生活の道具としてしばしば登場してはくるが、魂をもった主人公としては忘れられている。これは中国との相違点として確かに存在していると思う。

いろいろと理由を考えてみる。昔、日本は結局は中国ほど豊かな国ではなかった。家畜とのつき合いはごく近年になって始まったのだろう。家畜との接触が少ないから、創作の素材はもちろん足りないであろう。この点から見れば、日本の昔話の中で家畜の登場の回数が野生動物ほど多くないのはあたりまえであろう。

(2) 日本と中国で、人間が動物と結婚するいわゆる異類婚話が多い。

両国の動物話に、人間と動物が結婚する話がかかり出てくる。日本人と中国人は農耕民族であって牧畜を業としてこなかったので、遊牧民族のようによく動物を屠殺して食べることはあまりなかった。そこで、日本人と中国人は動物を一段下にみず、仲間扱いにしていたと思う。だから、人間と動物の愛と結婚の動物話もことに多い。

異類婚話の内容について、両国の共通点と相違点をみよう。

異類婚話の動物妻のあらわれかたをみて、日本と中国はかなり異なる。中国では『かた

『つむり女房』の例に典型的にみるように、動物妻は、たいていは男性が別にその男に恩をうけたわけではない。仕事に出て留守のあいだにそと女の姿になり、家事を片付け、料理を作り、それが済むとまた隠れてしまうのである。そういうことが何日か続いた後で不思議に思った男性が、外へ出かけるふりをして隠れていると、それとも知らず動物妻はいつものように女の姿になりいそいそと働きだす、そこへ男が飛び出して行って彼女をつかまえ妻になる、という話が圧倒的に多い。

それに反して日本の動物妻はたいてい夕方につつましやかに姿をあらわし、道に行き暮れたと一夜の宿を求める。それは以前に助けてもらったとか何かの恩義を受けた男性の家であり、恩返しをしたいと思ってくる。東北地方の動物話の『鶴の嫁さま』などはこのタイプに属している。

動物妻のあらわれかたは日本と中国が違うが、話の結末は両国が全く同じである。つまり、動物と人間の会いと結婚は別離や悲劇に終るものが多い。日本の『葛の葉狐』のように、動物が人間の姿となって人間と結婚し、しばらく幸福の生活を送り、子供もできたりするが、やがて人間が約束を破ったり、またはふとしたことから動物の本性が見あらわされたりすると、動物は再び元の姿になって自分たちの世界に戻って行ってしまふ。中国の有名な動物話の『田螺娘』『鶴女房』もそうである。かならず破局がくるのが日本と中国の異類婚話の共通点である。

結び

日本と中国の動物話がよく似ているのは、創作の基礎が同じからである。創作の基礎といえば、歴史や文化のほかには生産力も一つの要素であると思う。どんな文化でも、歴史的にみればみな生産力の進歩に従って生まれ、栄え、衰え、そして変化すると言える。こういった自然の軌跡の上を絶え間なく動いている。動物話も一種の文化であり、生産力のたまものであり、この自然の規律から逃げられることのできないものである。

日本と中国は原始の時、農耕ができなく狩猟民や採集民として生活していた。その時の生産力は非常に低かったので、人間はまだ自然と動物界を支配できない。そして、人間は動物の強さと力を感じ、動物に畏敬の念をもっていた。だから、昔の動物話の中で、一般的に動物は不思議な力をもっていて、一方人間は動物と比べて弱者である。この現象は日本と中国だけではなく、世界の何処もそうであろう。

日本と中国は生産力の発展に従ってともに農耕社会になった。この時の人間はもう自然界の支配者になった。狩猟、農耕、漁撈、あらゆる生産活動の場において、生産者が幼児のころからもう動物たちと接触し始めたから、動物話の創作の素材も多くなった。だから、この時期は動物話の創作の黄金時期である。また、日本と中国のこの時期にできた動物話は、単純に動物の強さを描くものではなくて、動物と人間のかかわりあいに関する話が多い。

近代になってから、生産力の発展と科学の進歩のため、動物話の創作があまりなかった。これは、動物が人間に対してもう神秘感がないからであろう。

日本と中国は生産力の発展が時間的に違うが、発展の軌跡が全く同じである。さらに地域も文化も思想も近いから、動物話について両国の共通点が非常に多いのは驚くべきではないことであろう。

主要参考文献

- 『日本の民話』 瀬川拓男・松谷みよ子編 角川書店
- 『日本人と民話』 小沢俊夫編 ぎょうせい
- 『日本の昔話』 関敬吾著 日本放送出版協会
- 『昔話と日本人の心』 河合隼雄著 岩波書店
- 『中国の民話』 上下 村松一弥編 毎日新聞社
- 『中国民間故事選』 第三集 賈芝 主編 北京人民文学出版社
- 『中華民族故事大系』 1 上海文芸出版社
- 『世界の伝説』 1 動物、植物 ぎょうせい